

②「あの日あのとき」甚句 ～釜石郷土資料館にて～

堀 美宇

(岩手大学人文社会科学部人間文化課程3年)

2019年11月23日に災害文化研究会のスタディーツアーが行われた。今回のツアーで最初に訪れたのは釜石の歴史を語り継いでいくための「釜石郷土資料館」である。この日、資料館にはわずか30分程度しか滞在できなかったものの、非常に激しく心を打たれた。この30分間で何を体験したのか。釜石郷土資料館では2011年3月11日の東日本大震災で起こった事実を「歌」にして伝承する「あの日あのとき甚句」の披露が行われている。どんなに時代が変化しても「歌」にすることで「忘れてはいけない事実」を伝えていきたい、そんな願いを込めて今でも新しい甚句を作り続けているという。「あの日あのとき甚句」は、歌い手と踊り手の2人が息を合わせて行うのだが、披露の前に歌い手である藤原さんがどんな経緯でこの活動を行うに至ったかを話して下さった。3.11の震災でお兄さんを亡くされた藤原さんは親しんだ甚句を2、3年の間、歌えなかったそうだ。それでも周囲の人に励まされ、辛い過去を受け止めて今、語り部として「あの日あのとき甚句」を披露されている。その中で、「釜石の奇跡」と言われる釜石東中学校の生徒が地域住民を巻き込んで避難した様子、それからたくさんの犠牲者を出した「防災センター」での悲惨な事実を「歌」にした2つの甚句を見せて頂いた。そのときのお二人の表現力は、まさにその当時の様子が目に浮かぶもので、哀しさの中に「生きる力」を感じる力強さもあるようだった。そこからは津波の無情さ、逃げ叫び悲しむ人々、なんとも言えぬ苦しさが一ひしと伝わる。甚句が終わり、私は無心でお二人に近づき、涙を流しながらただ握手を求めている。お二人は気持ちの整理がつかない私を受け入れて握手に応じ、包み込むような温かさの下さったが、そのときの私は「またお会いしに戻ってきます」とだけ伝えるので精一杯だった。新年を迎えた今、改めてあの日を振り返ると1日のすべてが濃密で私の容

量を超える学びを得ることができたと実感している。その1日のはじめに「あの日あのとき甚句」やお二人に出会えたことは改めて「災害」、「復興」を深く見つめるきっかけとなった。最後にこのような機会を得られたこと、そして原稿執筆をさせて頂けたことに心から感謝しております。ありがとうございました。

震災甚句



甚句の発表風景



あの日あのとき甚句



釜石郷土資料館